

特別講演 I

座長：石塚 修（信州大学）

QOL 改善に役立つ漢方薬

富山大学附属病院 和漢診療科

貝沼 茂三郎

泌尿器科領域において前立腺肥大症、膀胱炎、過活動膀胱、慢性前立腺炎などに伴う種々の症状、また頻尿、尿漏れ、排尿痛、残尿感、下腹部痛、会陰部痛など多彩な症状があるにもかかわらず、器質的な障害を認めない尿路の不定愁訴に対し、漢方薬は比較的多く用いられている。とりわけ漢方治療は西洋医学的な治療でうまくいかない場合に選択されることが多いが、その際には「病名投与」といわれる西洋医学的な観点から処方を選択されることが多い。

しかし本来、漢方治療は全体を俯瞰して、いかにバランスが崩れているのかを漢方医学的病態を把握する物差し（陰陽・虚実・気血水など）を用いて分類し、それらに対応する漢方処方を投与する。その際には食欲や睡眠、排便に関する問診はとても重要な情報であり、それらの状態を改善することで主訴や他の様々な症状が改善することもある。また患者のQOLを改善するために倦怠感を軽減することとても重要である。

漢方薬は日常診療で利用しやすい医療用漢方製剤だけでも100種類以上ある。これらを適切に運用できれば、診療の選択肢をさらに増やすことができる。そのためには、漢方医学の知識、診察方法の習得が必要なことは言うまでもない。しかしそれらすべてをすぐにマスターすることは実際には難しい。ひとつの工夫として、四診（望聞問切）を通じた診察方法の中で、漢方医学的病態を把握するための問診を適切に行うことで漢方薬の奏効率を上げることができる。本日の講演ではQOLを改善するため「全身倦怠感」、「食欲低下」、「便秘・下痢」、「不眠」に対してよく用いられる処方、すなわち「全身倦怠感」では人參養栄湯と補中益気湯、「食欲不振」では六君子湯と人參湯、「便秘・下痢」に対しては桂枝加芍薬大黄湯と半夏瀉心湯、「不眠」に対して柴胡桂枝乾姜湯と抑肝散を処方する際にどのような問診が有効なのかについて、具体的な症例を提示しながら鑑別点などについて解説する。

『加えるべき問診』

全身倦怠感…寒がりですか？ 眠れますか？ 息苦しさなどありますか？

食欲低下…水を飲むとお腹がチャポチャポしますか？

不眠…不安感がありますか？ 怒りがありますか？

便秘…便秘するとどうなりますか？ お腹が張りますか？ 排ガスが臭いですか？

下痢…肛門の灼熱感や裏急後重がありますか？